

新収日本地震史料を読む その 4

首藤 伸夫*

1. はじめに

今回の報告は、6章からなる。新収日本地震史料からの引用文は「」で示し、その後(新収 1, p.8)のように引用頁を示している。なお、新収日本地震史料に加え、一部では武者金吉:日本地震史料、及び震災豫防評議会:増訂 大日本地震史料を引用する事もある。

2. 今切の誕生

現在の浜名湖は幅約 200m の川で海と繋がって居る汽水湖であるが、元々は図-1 に示すように西へ流れる浜名川を通じて海へと流れていた。そのため、海水は浜名湖に流入せず、「遠(トホ)つ淡海(アフミ)」と呼ばれた淡水湖であった。(文献 1)

そのころの状況を文献 2 は次のように述べている。

「3 かつての浜名川と今切れについて

奈良時代や平安時代の新居は、浜名湖の南に位置し、当時栄えていた橋本宿と前沢宿(舞阪)は 1.5 里離れ、地続きで、橋本千軒、北山千町、日ヶ崎千軒の家並みが舞阪まで続いていた。新居のお寺の住職さんが舞阪まで下駄ばきで歩いて用事を足しに行ったとも言われている。またその当時、浜名湖から白須賀の東に向かって浜名川が流れ、今の日ヶ崎の付近に「浜名の橋」という長さ 167m、幅 4m、高さ 5m の大変立派な橋もかかっていた。浜名川の河口付近は「帯の湊」といわれ、その湊からその当時日本国内で 5 本の指に入るほど盛んだった湖西の窯で作られた須恵器が、遠くは青森まで運ばれていった。その繁栄も

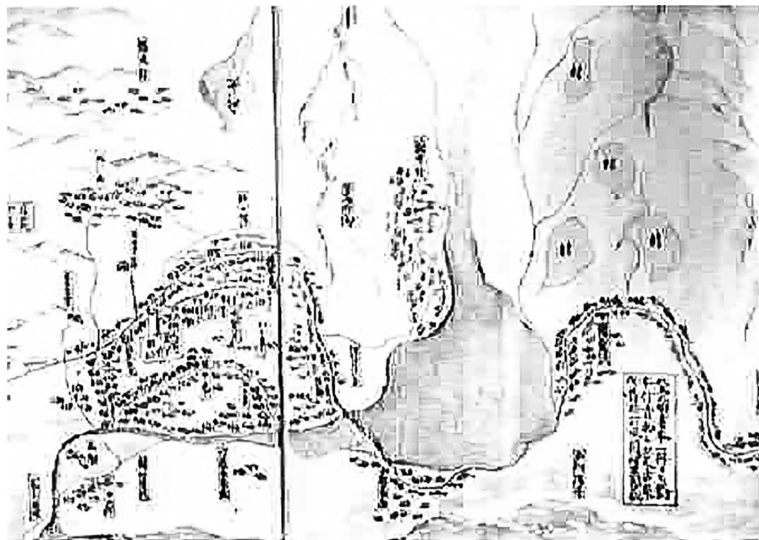


図-1 今切れ以前の浜名湖河口付近地図(文献 2)

*東北大学名誉教授

にぎわいも、1096年永長1年の地震、1406年応永13年の地震、1492年から1500年の明応年間に頻発した地震により、大きくその姿を変えさせられたのである。」

図-1が今切れ以前の地形であるが、地名などは読み取れず、またこの図の出所も記載されていないので、詳細を知ることが出来ない。

この周辺の地形変化を掘削を行って調べたのが、藤原他(文献3)である。それによると、「§2. 浜名川の地形

浜名川は、北側の更新世後期の海成段丘(天伯原台地; 杉山, 1991)と南側の砂丘列との間を流れる小河川である(図1)。海成段丘と低地の境界は比高50m後の崖になっている。現在の浜名川の両側には旧流路と後背湿地からなる幅300~500m程度の氾濫原が帯状に延びている。北側の段丘から発する小谷がこの低地に注ぐ場所には、しばしば小規模

な扇状地が形成されている。低地の南北両側は比高数mの微高地になっている。北側の微高地には日ヶ崎などの集落があり、東海道が通っていた。南側の砂丘やそこから低地へ続く微高地には、中世までの遺跡が分布する(新居町教育委員会, 1998)。つまり、中世には砂丘に閉塞された氾濫原が出来上がっていた。松山集落の西方には角避(つのさく)と言う小字名がある(図1B)。これは湖口を守る神である角避神社の旧所在を示すと考えられ、この近くにかつて河口があったと推定される(矢田, 2009)。1946年に米軍が撮影した空中写真や地形図では、角避の南側で砂丘が幅約150mにわたって途切れており、ここで浜名川の流れる低地と遠州灘が繋がっていたように見える(図1)。以上のデータから、中世までの河口の位置を図1Bのように推定した。これは嶋・向坂(1976)が遺跡や地形の情報から推定した流路・河口位置とほぼ



図-2 位置図 A: 調査地周辺の地形(空中写真は1946年米軍撮影による)
B: 調査地域と掘削位置(○ジオスライサー, ☆ボーリング)。
1/25,000地形図「新居町」を使用(文献3の図1)

同じである。ただし、海岸部は風成砂などに厚く覆われているので、地形のみから旧河口を認識することは難しい。旧河口の位置や閉塞の時期を知るには、地下に埋もれている河川から湿地への変化を示す地層の確認と年代測定が必要である。」

グーグルマップで、その周辺を示すのが図-3である。角避と云う小字は突き止められなかったが、道路の形状などから推測した河口位置を示している。湖西市の松山公民館や神田神社の付近である。ここから現在の浜名湖湖口までは約4.5kmある。

現在の湖口が何時出来たのかは、文部省震災豫防評議会：増訂大日本地震史料第一に次のような古文書が引用されている。

まず、〔東栄鑑〕からとして

「明應七年八月廿五日、(1498.9.20) 諸国大地震、遠州前坂ト坂本ノ間ノ川ニ津波入り、一里餘ノ渡シトナル、是ヲ今切ト號ス」(増訂1, p.453) とある。

続いて、〔続史愚抄〕から

「明應七年六月十一日丙子、地震大動、諸国大震、遠江山崩地裂成湖、名新居云、……新居及今切等名一説永正七年(注：1510.9.21) 度云、未詳」(増訂1, p.453) と続い

ている。

ところが、この今切れが生じたのは、明應8年だとする古文書もある。

〔東海道名所圖會〕には

「 濱名湖

濱名ハ郡名也、 國號遠江も此潮水に基也、一名猪鼻湖、又は遠潮ともいふ、○中略又近きとし、蝶夢幻阿彌の遠津湖の記に、○中略おほよその廣さ北に入事五里にあまり、東西四里にすぐ、南はひたふるの大海也、山々三方にならび立りと云々振裾記に、むかしは此國名の水うみ有しが、後土御門院明應八年六月十日、洪水の變ありて、水うみとしほ海とのあいだきれて、潮入て水うみはなくなるゆゑに、今切といふ也、濱名の橋は、水うみよりおへる川にかゝりしゆゑ、今はなし、

今切

御土御門院御宇明應八年六月十日、大地震して湖と潮とのあいだきれて、海とひとつに成て、入海となるこれを今切といふ、」(増訂1, pp.454-455)

さらに

〔編年小史〕には

「明應八年六月十日

遠州橋本甚雨大風、海涌潮溢、濱居皆漂蕩・湖海之間、驛路亦所没、因成舟航、是曰今切渡、驛宿曰新居」(増訂1, p.455)

また〔遠江國風土記傳〕には、



図-3 浜名湖湖口周辺図(グーグルマップより作成)

「濱名郡中之郷、關ノ西北十町、屬入海
新井本字荒井、古歌詠安禮乃崎
荒井、舊非鄉村宿驛之名、而海岸石碕之名也、
此所南海非時波、洲渚大荒、故曰荒也、萬葉
集高市連黑人歌曰、何所爾可船泊為良武安禮
乃崎椅多味行之棚無小舟、後為村號、舊荒井
中荒井等地、水没亡人家、古老曰、今荒井者
古中之郷也、古荒井在關東海中十二三町、應
永十二年、文明七年、明應八年、及永正七年
等有急波、破荒井崎、湖水變為潮海矣、日箇
崎千古、北山千古、舊荒井、中荒井、同時為
海、於今切所號本荒井、於松原中云中荒井也。
礎石於今存焉、而後寶永四年十月四日、地震
大波、關東十二町水没、地形大變矣、昔時橋
木新井各千戸郷也ト云ヘリ、驛家同所水驛」
(増訂 1, p.453)
とされており、明應 7 年の津波には言及されて
いない。

(注：應永十二年 1405 年 地震記事無、文
明七年 1475 年地震記事無、明應八年 1499 年
地震記事無、及永正七年)

これらの古文書の信頼度であるが、東榮鑑
は偽書とされており、その著者、発行年など
を調べようとしても、その手掛かりさえ掴め
ないのに比べて、遠江國風土記傳はフリー百
科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』にも
載っている。にも拘わらず、今切れの発生は
明應 7 年だとされている。

その理由について、増訂大日本地震史料の
編者の一人田山實は次のように説明する。

「(田山註) 實按ズル、風土記傳、名所圖
會、編年小史ノ今切洪波ヲ明年六月十日ニ掲
ゲタルハ、並ニ誤レリ、看聞御記、子良館記
等ニ參スルニ是日、三河・伊勢・伊豆ノ海嘯
ヲ記セリ、其同日タルヤ知ルベシ、且果シテ
明年六月十日トセバ、當時飛鳥井雅康、富士
山ヲ遊覽シ、歸途ニアリ、會ミ遠江ヲ經、同
日ハ小夜中山ニ在リ、十三日引馬野濱松ノ北ニア
リヲ過ギ、十五日汐見坂遠江三河ノ國境ニアリヲ越ユ、
而シテ其記事、絶テ風雨地震ノコトニ及バズ、
又沿道罹災ノ状ヲモ記サズ、亦以テ三書ノ誤
謬ニ出デタルヲ知ルニ足レリ、東榮鑑ハ後人

偽托ノ書ナレドモ、本年八月二十五日ニ掲ゲ
シハ、實ヲ得タリト謂フベシ」(増訂 1, p.455)。

では最近の研究者はどのように考えてい
るのであるか。宇佐美龍夫は、2011 年 6
月 30 日第 5 刷の最新版日本被害地震総覧
(pp.46-47) で明應 7 年 7 月の地震において、

「……矢田[1996, 明應地震と港湾都市, 日本史研
究, No.412, 1996.12]によると紀伊和田浦、遠江橋本、
伊勢安濃津では砂丘が切れ、川が直接海につ
ながり、橋本・安濃津は潰れ近くに移転した
という。」というにとどまり、橋本周辺の名
前が今切となったとは述べていない。そして
永正 7 年 8 月 27 日 (1510 年 10 月 10 日) の
項に、「遠江 津波あり。古文書はすべて浜
名湖、今切の由来に関するもののみ。地震に
由らざるものと考えられる。」(p.47) と初め
て浜名湖に触れているが、地震による津波で
はなく、高潮が原因としているようである。

宇佐美が引用した矢田俊文の論文と同趣旨
と思われるものは、日本の歴史地震史料 拾
遺四ノ上 (p.20) でも見つかる。和歌山地方
史研究会 1991.8.3 発行「和歌山地方史研究
21」に掲載されたとする、矢田俊文著「明應
七年紀州における地震津波と和田浦」である。

「二、明應七年八月二五日の地震津波

地震は明應七年 (一四九八) 八月二五日に
起こった。震源地は東経一三八、〇度、北緯
三四、〇度、震度はマグニチュード八、二～八、
四度であった。被害は各地に広がり、安房小
湊・鎌倉・伊豆仁科・内浦湾・清水・焼津・
浜名湖・伊勢大湊で、五メートルから八メー
トルにも達する津波が起った。明應七年八月
二五日の地震によって、浜名湖が砂州の決壊
により海とつながり、伊勢の安濃津が壊滅し、
同じく、伊勢の大湊の塩田が全滅した。」

渡辺偉夫の日本被害津波総覧 (第 2 版 1998
年 2 月 25 日) では、明應地震は 1498.9.20 (明
應 7.8.25) 辰刻 (午前 7～9 時) に発生し、「紀
伊から相模湾にかけての海岸と甲斐で振動が
大きかった。……

浜名湖は津波で切れ海に通じる（今切れの地名を残す）。」（p.69）とし、地震による津波ととらえている。

文献（2）は、明応地震によるとし次のように記述している。

「4 明応の地震について

西暦1498年9月20日明応7年8月25日午前8時ごろ、明応の大地震といわれる地震が起きた。震源地は御前崎沖と推定されている。地震の規模はマグニチュード8.4と推定され、被害は紀伊半島から房総半島まで及んだ。津波の高さは、新居・舞阪が6～8m、白須賀が6mといわれている。

浜名湖の南端にあった前沢地域が津波で切断され、生き残った36戸が舞阪に移ったとも言われている。また浜名湖は、地盤沈降傾向の強い地域であり、幾たびかの地震により地殻変動を起こしている。地盤の沈降や地震による津波、また毎年のように襲う暴風雨による高潮は、遠州灘の堤を脆くし、今切れの口を開いた。また明応の巨大地震の翌年の暴風雨は、大倉戸に山津波をおこし、その土砂が浜名川の出口をふさいでしまったため、今切れの口は大きく開いた。」

「〔ふるさと百話十〕▽

○「今切の渡しと舞阪」

明応七年（四九八）八月二五日大地震と津波で一瞬のうちに舞沢は押し流され湖底に没した。難を逃れた三十六戸の人々は、東方松原に居を求めて移り住み、舞沢の復興に努力して今日の舞阪を築きあげた。舞沢の切れた所をそれから今切と呼ぶようになった。縁談がまとまった若い女性は今切れの呼名をきらって、湖北の岸を通る本坂峠道を選ぶようになり、この道を姫街道と呼ぶようになったともいわれている。

弁天島は、この津波のため大石が崎の先端が切れ離れ島となった。この島に今切り渡船の海上安全の守護神として弁天神社を建立し

たのは、宝永六年（一七〇九）のことである。」（新収1 p.116）

107年後慶長の大地震

明応地震から107年後、慶長9年12月16日（1605.2.3）慶長の大地震が起きた。

〔東照宮實記〕によると、

「慶長九年十二月十六日、今夜遠江國舞阪邊高波打あげ、橋本邊の民家八十ばかり、波と共に海に引入られ、人馬死傷少からず、釣船は廿艘ばかり踪跡を失へり、その時伊勢の海濱は敷町干潟となり、魚貝あまた其跡に残りしをみて、漁人等是をとらんと干潟にあつまりしに、又高波俄に打上て、漁人等皆沈没せり、伊豆の海邊、みなこの禍にかかりし、中にも八丈島にては、民家悉く海にしづみ。五十餘人溺死し、田圃過半は損亡し、上總國小田喜は、こと更濤聲つよく、人馬數百死亡し、七村みな流失す、攝津國兵庫邊は更に害なしとぞ」（増訂1, p.671）

また、〔松阪市史〕には、

「熊野三社古書東海西海南海大地震大津浪死者五〇〇〇土佐の溺死三八〇〇也

北牟呂郡年表 津浪あり 人家流失に至らず。

津市史稿 今夜 遠江国 舞阪辺高波打上げ橋本辺の民家八十ばかり波と共に海に引入られ人馬死傷少からず、釣船は二十艘ばかり踪跡を失へり其時伊勢の海嘯は数丁干潟となり魚貝あまた其跡に残りしを見て漁人等之をとらんと干潟に集りしに又高波打上て漁人等皆沈没せり。」旧藩士長氏（賢照君記録）（『三重県災害史』）（新収2, p.93）とある。

文献（2）（p.41）によれば、これらをまとめた形で、

「5 慶長の地震について

明応地震より107年後、西暦1605年2月3日慶長9年12月16日、夜8時ごろ慶長の大地震が起きた。震源地は、房総半島沖と紀伊水道南方沖の両方である。マグニチュードは7.9と推定され、地震の揺れは小さいにもかかわらず、大きな津波が押し寄せたため、津波被害の多く残された地震だった。津波の

高さは標高 6m にあった白須賀の宿場が全家屋浸水したということで 8m 以上と推定されている。

今切れ口の海辺にあった舞阪や浜名湖内に突き出した新居の被害のほうが、浜名川に面した橋本より少なかった。それは、当時橋本の南を流れていた浜名川の川幅が広く、浜名湖から津波が遡り被害を大きくしたためである。また橋本に 100 軒あった民家のうち 80 軒が流され、海上の船は山際に打ち上げられた。また地震の後、引き潮になった干潟で魚や貝を拾っていた人も津波にのみこまれてしまった。人馬とも死傷者少なからずと古文書に記されている。」

とし、人や家屋、舟の被害について述べて居るものの、地形への影響には触れていない。

更に 102 年後、宝永の地震

宝永四年十月四日 (1707.10.28) の大地震は規模が大きく資料が多いので、新収日本地震史料第 3 巻別巻としてまとめられている。

この時の津波で浜名湖湖口の今切口が大きくなり、新居宿の移転もあって交通障害を引き起こす。

静岡県豊田市の〔ふるさと豊田〕には、

「元禄十四年 (1701) と宝永四年 (1707) の再度の津波で今切口がだんだん大きくなって一里にも及び大口をあけてしまったので太平洋の波が直接打ち寄せるようになって、この一里の渡海をさけて、姫街道の道を利用した。「法螺でない荒井の津波路」とは、舞坂・新居間の海の危険度を言ったもので、この渡船の危険を避けて姫街道を利用した。」(新 3 別, p.187)

静岡県浜名郡〔新居町誌〕には、

「宝永ノ変

第一百二代東山天皇ノ宝永四年亥十月四日 (1707) 大地震大海嘯アリ元禄ノ変ニ移転後未ダ幾何も経過セザルニ亦モ大ナル打撃ヲ被リタル折角安全ナリト思ヒシ中新居モ亦住民ヲシテ其堵ニ安ビシムルニ足ラズ居ルコト僅カ七年ニシテ翌宝永五年 (1708) 今ノ地ニ

移転セリ斯ノ如ク新井宿ハ数度ノ天災ノ為メニ二回ノ大移転ヲ行ヒ元新居 (大元屋敷) 中新居 (中屋敷) 現今ノ新居ト三ヶ所位置ヲ変シタルナリ」(新 3 別, p.207)

こうした移転の結果、新居・舞阪間の渡船路が長くなる。新居町史編さん委員会〔新居町史 第八巻 近世資料 四 宿方・地方資料〕には、

「(三) 宝永地震と惣町移転

三六 宝永五年三月 新居宿が総移転する

一新居町所替者戊子 (宝永五年) 三月、但シ御開所者同月廿一日移ニ (ママ) 候、町者三月・四月両月ニ元新居方引越申候、此所替之儀者、宝永四年丁亥十月四日昼四ツ時大地震、半時程過午之上刻津浪打、新居中へ汐揚り、渡海場并町共ニ所替之儀、御公儀様願上申候、其節道中筋御見分爲御用竹村宗佐衛門様 (勘定組頭 嘉躬) 并御代官細田伊左衛門 (時矩) 様、外ニ平御勘定衆御兩人此表御通之節、所方問屋・庄屋衆申上、御見分場所御覽、元新居方此中之郷・内山之間へ田ヲ埋引越被仰付候、

.....

宝永五年正月から関所・町家の移転工事は始まり、早くも同年三月～四月に完了した。この結果、新居・舞阪間の渡船路は一里半となった。」(新続補別, pp.40-43) と、約 6 km にもなったと記している。

静岡県の〔浜松市史 一〕には拡幅には触れていないが、生じた混乱について、

「宝永地震

宝永四年 (1707) 十月四日の昼八ツ時 (午後二時) に大地震が起こり

.....

またこの地震によって、今切渡舟杜絶し、東海道が困難となり、旅人は本坂越をするようになり、浜松宿の休泊者激減して、宿場町は一層困窮におちいった。」(新 3 別, p.189)

と渡船が無くなり混乱が起きたとし、

続く〔浜松市史 二〕では、

「姫街道が脇往還としてもっともその機能をあらわしたのは、宝永四年 (1707) 十月四日の東海道地震の直後であった。このとき、

今切の「御関所潰レ津波ノ上ル事大斗ニシテ三度」で「渡海止ル事四五日」(富田政愈「御関所由来并旧跡記」『新居町史史料編』), そればかりでなく「今切之渡海広罷成故, 浪荒渡舟不自由」(「宝永の災害」『細江のあゆみ』3号) になったので, 一時に姫街道に人馬が殺到するようになったのであった。『本坂御往来留書』にも「五日の朝より本坂江往還之旅人荷物迄通り享保二酉年迄御通行繁有之」とあって十月四日より十二月晦日まで上下通行百四十七回, 四百七十七人, 翌宝永五年は上下三百五十八回, そのうち千人以上が十二回, 百人以上が六十四回におよび, ことに同年六月四日松平民部大輔の通行には無慮六千人に達している。もってその混雑ぶりが想像されよう。これは浜松宿をはじめ東海道の諸宿にとって「御役難動渡世経営不罷成迷惑」のことで, 宝永六年三月には浜松宿をはじめ舞坂・新居・白須賀・二川・吉田の六宿よりの「見付宿より市野村, 御油宿よりすせ村江人馬継立不申様に被為仰付被下候は, 難有奉存候」という歎願となった(『浜松市史史料編二』)。その結果本坂道通行の差留となったのが享保二年(1717)十一月で, 地震以後十一年日であった。といっても, 享保三年四月には浄円院(将軍吉宋の生母)の通行があるというようなわけで, やはり本坂道を往復するものはあとを絶たなかったのである。このとき動員された人馬は嵩山から袋井までの六宿で五千九十二人, 馬千八百七匹であったという。」(新3別, p.190-191)

この辺の事情を文献2は, 次のようにまとめている。

「6 宝永の地震について

また慶長の大地震から102年後, 西暦1707年10月28日宝永4年10月4日, マグニチュード8.4と推定される巨大地震が起きた。震源地は東海沖だった。

その日の新居は風もなく, 陰陽もわからず, 澄んでいるのか濁っているのか何とも言いようのないどんよとした空の色だった。午後2時ごろ, 突然天と地がひっくり返るように大地が揺れ, 家を動かし, 屋根の石や瓦が落

ち, 人は歩くことも立っていることも自由に行えない状態になった。揺れは次第に強くなり, 大地が割れ, 泥を噴出した。町中の家は将棋倒しに崩れ, 倒れた家に火が回って燃え出したが, 1時間後に津波が来て鎮火した。住民は関所裏にあった湊大明神の庭に逃げ込み, 津波から逃れた。この時, 新居の宿は3度の大津波があり, 今切れの湊に停泊していた大きな船を陸に打ち上げ, また湊口に引き返すこと3度を数えたということである。

宿場のあった町の根元(現在の文化公園付近)は津波で切り離され海に代わり, 関所も宿場も島の中という状況だった。新居宿の被害は, 死者39人, 家数850軒のうち, 241軒が流失し, 170軒が全壊し, 残った家もほとんど壊れた。この地震の後, 新居高校あたりにあった関所や寺や町(西町, 中町, 城町(泉町)が, 現在の地にそっくり移転した。宝永の総町移転といわれている。現在の高見, 俵町, 船町, 源太山等ができ, ほぼ現在の新居町の形となった。また隣の白須賀宿は被害が特に大きく, 流失家屋45軒, 全壊した家51軒, 半壊37軒, 漁船, 漁具などは残らず流出し, 浜沿いの元町にあった宿場は全滅した。翌宝永5年幕府より1万340両の助成を得て, 潮見坂をあがった現在の地へそっくり移転した。また, 白須賀の西に長谷という集落もあったが, 白須賀宿の移転と同時に北側の台

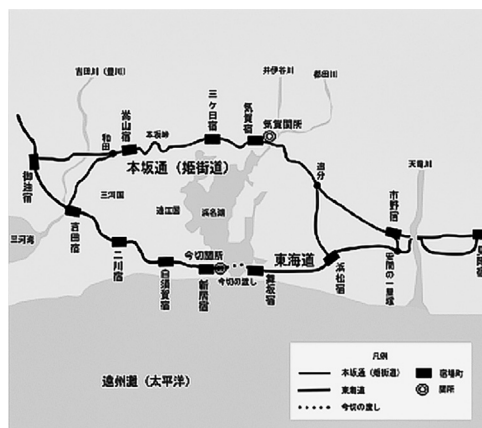


図-4 東海道と姫街道(文献4)

地に全部移転した。

関所や、新居宿場、白須賀宿の移転などで東海道が通行できなくなり、旅人は姫街道を通るようになった。 急なことで姫街道沿いの村々是对応に苦慮し、新居、舞阪、白須賀、二川などは復興後もなかなか旅人が戻らず宿場は寂れた。姫街道沿いの町も、東海道沿いの町もそれぞれの事情を幕府に申し立てたが、状況は改善されず、30年を経過してもなかなかよくなるはならなかったということだった。初期対応を的確にすることや有事の際に万全を期しておくことは、今も昔も変わらず、難しいものと推測された。

また白須賀の長谷の部落は、宝永の地震、津波も含めて、それまで度々津波や高潮の災害に見舞われてきたことが、長谷元屋敷遺跡の発掘調査で明らかにされている。」(pp.40-42)

その後の経過については、文献 4 によれば、次の通りである。

「姫街道は愛知県御油宿から静岡県？付宿の間を浜名湖の北岸経由で結ぶ東海道の脇街道である。

正式には本坂通と呼んだ。愛知県と静岡県の境にある本坂峠はこの間の難所である。本坂の名の由来は古代において愛知県側の国名が「穂の国」(三河の国・宝飯郡)であり、「穂の坂」または「穂の境」がなまったものと言われる。

中世末期から近世初期にかけて栄えたが、江戸幕府により東海道が整備されると険しい山越えのある本坂通はさびれ、「ひね」た脇街道に転落した。そこで本街道である東海道を男、脇街道の本坂通を女に見立ててこれを「姫街道」とも呼ぶようになったという。一説には東海道の新居の関所を「今切関所」ともいい、新居・舞阪間を「今切の渡」と呼んだため女性にとって縁起が悪い言葉として嫌われ、また船の危険を避けるため女性はこのルートを避け、本坂通を通ったからともいう。

明応 8 年 (1499) この地を襲った津波により、浜名湖と遠州灘が大きく切られてから舟

で渡るようになった。

ところが宝永 4 年 (1707) 東海地方を襲った大地震のため今切渡船場が破壊され通行不能となって俄然交通は本坂通に集中した。翌年東海道は復旧し幕府は本坂通の通行を禁止したが、危険を感じた旅人の多くは本坂通を利用した。明和元年 (1764) 幕府は本坂通を東海道の別道として認め道中奉行の支配下においた。ただしその管轄地は御油-気賀-浜松ルートになっている。これ以前には今も一里塚が残っている気賀-市野-安間ルートが本道であったが、このころ浜松宿が大いに発展し、逆に市野宿は定期市が他の村へ移り宿場が衰退していたためらしい。

明治 2 年新政府は諸道の関所を廃止し、古い街道の時代は終わった。」

3. 鴨島の消滅

万寿三年五月二十三日 (1026.6.16) のことである。石見国現在の島根県、益田市の海岸にあった鴨島が地震と共に消滅し、発生した津波は高さ 20m もの痕跡を残した。この津波の発生原因は地盤の鉛直変位によるものではなく、大規模な海底地滑りによるものであった云われている。

まず、過去の記録から見てみよう。

〔翁小助問答記大島小助記〕安田村発展史
○島根県には

「老人宜く『其昔高角鴨島遠田の柏島と云ひし名島あり知れりや』老人宜はく『鴨島には、其昔文武天皇の御宇、彼島に人麿居住する所に、一歳四海波の為に打ち壊さる。然れ共、人麿凡人ならざるに依りて、高津の松崎へ上り給ふ。さすがの聖神時の天災逃れ難し云々。又遠田の柏島、是奇代の名島なり。さるに依りて、人麿もより々々此島にも座ありけり

遠田なる沖にきぬまく千年松

波あらいそのゆきのしらはま
尚此島も鴨島とおなじ時にくづされにけり。
惜しむべし悲しむべし。二箇所の名島一時に断絶せしこそ、不思議なりけれ。

世人男島をば聞き伝へ、其蹟今に存せるが如し。其頃高津には、数千の人家有るに依り、語り伝へる所なり。遠田の儀は、其頃人家二三軒あり。人数も無き故、柏島の儀は語り伝へずなん。世人知らざるも、ことわりなりける。

〔島根県美濃郡 安田村誌〕

口碑伝説及美蹟

二、口碑に曰く本村は往昔現今海岸より平原部を三十町位奥に湾入して遠田の如きは一葉漁村なりしが万寿三年五月当地方の大海嘯にて高津沖に在りし鴨島半島を破壊し其の土砂が此湾に流入して沼沢の如くなり漁船の浮漕も意の如くならざるのみか西風を防止すべき鴨島は除かれ漁村としての維持経営は到底不可能となりしを以て住民協議の結果之を埋立て田圃とするに至る(下略)(新収 1, p.39)」

鴨島の風景は 図-5 のようなものであったと言われている。(文献6)

元々は、この図にあり、次の古史料にあるように、鴨山と云われていた。その沈没したところは、今は浅瀬となって大瀬と呼ばれているという。図-6に示す通りである。(文献6)

〔石見国名所和歌集成〕(石見名所方角図解)
鴨山 一〔新清云、一説に浜田城山を云と有共、風土記によれば、益田の城山也と云一〕鴨山は高角浦の沖に有。今は鴨島と云。此鴨昔は大き成る嶋にて、人丸の社、木像等有けるが、人皇六十八代後一条院の万寿三丙寅年大波起て、都て此辺の浦山おびたゞ敷崩れける。鴨山、鍋嶋等も、悉く崩れ、木像も失せさせ給ひたるが、其後木像は、浮木に乗て高角浦に上り給ふにより、再び社を宮つくり、今の所に鎮座ましますば、高角山、即鴨山なり。高角山の西に、なべ山八まんと崇祭れるは、昔のなべ嶋をうつせる也。なべ嶋の跡は今鴨かみ瀬と云鴨嶋の東に有。かもしまをはなるゝ事、十五歩斗。横三歩斗。立九歩斗。浅き所は或は四尋、深き所は十式三尋斗立とぞ。海上壱歩は七十尋にて、間にして、五十四間程也。形は波に沈み、底のみなりといへども、其名

は千歳の今にくちずして、諸人のよく知る所也。新清は神道の達人一流を立程の人成るに、いかなれば、此集を撰ぶに至りては、高田山、石川、かもやま等の慥なる所を誤りけんぞや。是成に所ひゝきとやらんの俗言をはなれ得ず。

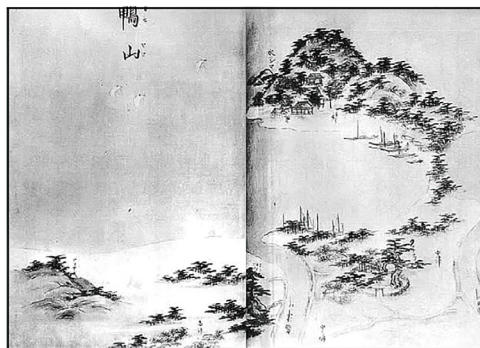


図-1 石見八重 葎に収録された鴨山の絵図¹⁾

右下に益田川、中央下に高津川と記されている。鴨山の麓や中腹には建物と島居が描かれている。

図-5 鴨山の想像図



図-2 津波に関する伝承・遺物などの位置図

★：津波到達の伝承地 ■：関連遺物などの所在地
□：トレンチ発掘調査箇所 【国土地理院発行
1/2.5万地形図「益田」「石見横田」を使用】

図-6 大瀬の位置

たとへば、伊勢物語に縛（注：けものへんに傳のつくり）の使を第一とせし類ならんかと云。」（新収 1, pp.39-40）

その他、鴨島に関連する古史料は、新収 1 によれば以下の通りである。

「7 万葉 人丸

鴨山の岩根しまける我をかもしらでや妹が待つゝあらん

（角部経石見八重葎）

○江川渡り山近辺の絵図委しく認め相添置。是ハ往古の図也。当時と言、地所ハ引合がたき処も在之。後一条院万寿三年丙寅五月二十三日の大津浪に玉江の里川向ひ渡津、長田海辺の風景も大に變ず。其時高津の沖、水嶋鴨山益田の岡の今寺垣と申村どもハ五宝寺と俗に申ほうの字付たる五ヶ所の大寺迄潰れ式間半四方のみかげの石十三の塔迄崩れし程の大変なれば此玉江の渡りの左右江津、渡津などの事も思ひ廻したまへ。また川より土砂を突出し、海辺多分陸地と成り。地理の姿もかわり、返す々々も古跡のむなしくならん事を思ひ絵図面にしるしぬ。

鴨山 景物〔岩根小松・掛り船・塩焼煙・鮑貝・千鳥・磯打浪・かもめ・日晚山読合・打歌山読合〕

新清広貞評 浜田にてハ城山とも、風土記之説によれば、美濃郡益田の町の頭七尾の城山といふ。

津和野御評 高津の沖に有。人皇六拾一代後一条院万寿三年丙寅大津浪によって崩れ、今ハなし。

小篠大記評 浜田にてハ城山といふ。高津ニ而ハ鴨山といふ。

.....

（石見海底能伊久里）

○鴨山那賀郡浜田

方角集云、一説に那賀郡はまだの城山也といへど風土記によれば美濃郡益田の城山也と。

名所記にもしるし、事跡考弁云、鴨山は高角の沖こありて今鴨島といふ。昔は大成島にて柿本神社木像等ありけるが人王六十八代後一条天皇の御宇万寿三年丙寅五月大津浪起りて、此辺のうら山悉く崩れ、鴨島、鍋島等も

悉く崩れて、木像も失させたまひけるが、其後浮木にのりて高角浦に上り給ひしより、再急造りして鎮座ましませば高津山即鴨山也。

今高津山に高角山西鍋島八幡宮と崇め齋るは昔の鍋島の跡をうつせる也。鍋島の跡は今鴨神瀬といふ。鴨島の東のかたにあたりて鴨島の地を離るゝ事十五歩許、横三十歩、堅二十歩。〔海上ノ一歩ハ七十尋也。間ニシテ二十五間に中ル〕むかしの鍋島、鴨島は波瀾にしづみて底の岩瀬と成ぬれど、其名は千歳の今に朽ずして諸人の知処也と。

〔柿本人麻呂と鴨山〕

上述「清岩茶話」の伝説は、万寿三年断層地震のため、大津波に埋没したと言う、鴨島説を述べておるが、この鴨島説としては、多分に誤り伝えられておる。鴨島説を早くから、真実に伝えたものに、「柿本明神縁記」がある。この説は当柿本神社に、古来から伝わる縁起を、卒直に述べたものである。

高津の洋に、昔は鴨島といへる大なる島山ありて、人丸も是におはせしなり。後一条帝の御宇万寿三年丙寅五月、海上に高浪起て、彼島をゆりこぼちて海中に没せり。人丸御廟に二穂の松とて、名木ありけるが、此浪に根を絶けり。其の後松枝に神像をかけて、近き浜に打よせたり。因て其処に、再び社を建立す。これを松崎と言と。「茶話」の説相違あり。何れにしても道理に害なければ、余が碑文には縁起の説にしたがふ。

とある。

元来高津の鴨島が、万寿三年の大津波に、湮滅したと言うこの伝説は、根強く地方民に信奉されて、今日まで経来つたのである。

~~~~~  
高津鴨山説は、上掲「柿本明神縁起」が語るように、高津の沖に人麻呂の終焉地たる鴨島があり、そこに人麻呂を祀る小社があったが、平安朝期後一条天皇の万寿三年丙寅五月二十三日の真夜中、突如断層地震のため、一朝にして鴨島を陥落させ、押しよせた大津波のため、人麻呂の社をも同時に流失、神体は波に押されて、松崎の松の枝にかかっていたのを、地民がこれをその地に奉斎した。これ

が松崎の人麻呂神社であり、間もなく別当寺として、人丸寺(にんがんじ)が建立された。これが高津の柿本神社の起源を物語るもので、今日の神社は江戸期になって、松崎の地からさらに、移転建立されたものである。

#### 鴨島の埋没

##### 一、万寿の大津波

後一条天皇万寿三年、丙寅五月二十三日の、真夜中亥ノ下刻、高津沖の石見潟が、一大鳴動を起すとともに、鴨島が水中に陥落し、思いもかけぬ大津波が襲来して、石西沿岸を中心とする、全石見の沿岸各村々に、大惨害を及ぼしたと言う。とりわけ、益田市内の高津・中須・遠田、及び那賀郡の江田・渡津・黒松等、高津川・江川の川口に当る方面は、後世の文献や伝説に徴し、甚大な打撃を被ったことが知られる。

##### 二、高津・中須の災害伝説

万寿の大津波で、最も大きな打撃を被った地所は、高津川口にあたる、益田市内の高津・中ノ島・中須の、諸海岸であった。中須や下本郷あたりに散在していた、専福・安福・福王・妙福・蔵福の、いわゆる五福寺は、この度の激浪により、おし流されてことごとく潰滅に帰した。

古伝説によると、中須沖の鴨島にあった人麻呂神社は、元聖武天皇の勅願により、神亀年間建立されたもので、その後別当寺として人丸寺が、これに附属していたと言う。が、この陥没地震のために、鴨島全体は近接の鍋島とともに、海中に陥没し、人麻呂の神体は、対岸の松崎に漂着した。災後そこを相して一字の社を建立、これに別当寺を添えて、松靈山と号したと言う。「島根県史」に

此寺(安福寺)はもと、本郡中洲村(今の中須)に在りて、天台宗に属し、安福寺と称し、世に所謂五福寺の一なる巨刹なりき。然るに万寿年中大海嘯のため、堂宇を悉く流没したるを以て、爾後小庵を結び、僅に寺号を存したり。

県社柿本神社社殿は、聖武天皇の勅命により、神亀年間高角港口鴨島に建立し、別当

人丸寺之に属したり。然るに後一条天皇の万寿三年五月、海嘯鴨山全面を、破壊したるを以て、その神体の漂ふ所を相して一祠を建て、寺を松靈山と称せり。爾後六百年鎮座ましますに、後世尚洪波の殃あらんことを恐れ、延宝九年藩主亀井茲政、現今の社他に移動せり。

とある。(中略)

##### 三、遠田の災害伝説

益田市遠山では、大地をゆるす大津波のために、海竜山遠田八幡宮背面一帯の砂丘は、一たまりもなく崩れ、砂土は前浜一帯の、原野や田地を埋めかくし、八幡宮の社殿も倒壊のまま押流された。同社はこれよりわずか八年前、後一条天皇の寛仁三年(1001)、斎藤中務丞と藤原重基とが、改築を加ええただけの、檜の香も真新しい社殿であった。高波の余波は、南西に方向を変えて、下遠の郷をさらし、中遠田の山野や草原を洗って貝崎に迫り、更に南進し上遠田の低地を這い、黒石の崎角、及び滑堤の堤防までおし迫った。

ために引潮の際、低地住民の資材は、ことごとく流失埋没し、原野や耕地の被害は、目もあてられぬ惨状を呈し、昔のおもかげは全く、夢と消え失せて、この世ながらの、生地獄を再現した。夜半のこととて、波にさらわれて行方不明となったものも、相等の数に上った。残留した住民とても、家財を失って生計の途を絶たれ、塗炭の苦に陥った。

当時上遠田では、坂上利兵衛りひょうえと、その子の喜兵衛きひょうえ、芝家の右兵衛うひょうえらがいたが、彼等はこの惨状にもめげず、敢然として立ち上り、率先災後の復旧に努力した。ことに右兵衛は、この災禍に妻を失って、悲嘆にくれていたが、今はそんなことに、くよくよしておられないほどの、重大な時期であり、危急の場合であった。彼等の刻苦精励は報いられて、さしもの惨禍も、昔の美田に回復することが出来、鼓腹謳歌の平和境を、ここに再現することが出来た。爾来この大津波に懲りた右兵衛は、祖先の祠堂を黒石の丘に移し、家を流失した居民にすすめて、居宅を小高い丘の上に改築させた。「沢江家文書」

には、この間の事情を述べて

万寿三年丙寅五月二十三日亥ノ下刻、大海嘯掩襲田疇。民驚悉流埋、山野催裂、亦不<sub>レ</sub>留<sub>レ</sub>昔日之蹤跡。残存民庶、瀕<sub>レ</sub>塗炭。利兵衛・喜兵衛等、懸<sub>レ</sub>身島<sub>レ</sub>孜々<sub>レ</sub>吶<sub>レ</sub>。右兵衛亡<sub>レ</sub>災禍於妻<sub>レ</sub>能持<sub>レ</sub>鰥。從自<sub>レ</sub>宗家<sub>レ</sub>久平入而襲<sub>レ</sub>之。既罹<sub>レ</sub>禍遷<sub>レ</sub>禪丘崎黒石祠、移<sub>レ</sub>衆庶居於阜<sub>レ</sub>頃<sub>レ</sub>遷宗家轆軻衰類、遂絶<sub>レ</sub>裔胄。(沢江家文書)

とある。

・・・・・・

尚遠田の伝説として、柏島が高津の鴨島と、共に陥没したことが、大島小助の記になる、「翁小助問答記」(元文年間記)に記され、鴨島の破壊後、その土砂が遠田湾に流入して、沼沢のようになり、漁船の出入が、困難になったことは、口碑として残され、「安田村誌」に記されておる。

尚、益田市乙子<sup>(おとこ)</sup>にも、同所にそばだつ、烏帽子山の麓まで波がさか上り、麓の井には三尾の鰯が泳いだと言い、鎌手地区本部には、この津波のために二艘の舟が、海から数町を隔てた、丘の山に打ち上げられ、二艘船の地名伝説を遺しており、同地区金山にも舟がついたと、大賀周太郎記「鎌手村史」に出ておる。

#### 四、江田・渡津附近の災害伝説

三隅町三保にも口碑を残しておる。木村晩翠著「三保村誌」に

此地(湊浦)往古は、人家稠密良港をなせしが、六十八代後一条天皇の万寿三年五月、美濃郡高津町<sup>(おとこ)</sup>の海嘯と同時に、人家全滅し、現今の福浦に移転したるなりと伝ふ。

とあり、那賀郡では三保以東、折居・周布・日脚・長浜・浜田までは、何等の伝説を持っていないが、下府に至って記録を存しておる。下府の泰林寺(国分尼寺)は、この津波により流没したと言われ、また「石見名所集」によると、下府の井について、「只今は川底となりて、其所を知らず。然れども神祭の度ごとに、河にて水を汲み用ふ。万寿三年の高波に埋りし由。」と記し、都野津町に湾入していた角の浦は、この津波のために、砂をうちよせ、一朝にして埋没して砂浜となったと言ひ、

和木の馬島にも伝説をのこしておる。

江田(今の江津)・渡津附近の伝説は、石田春律著「石見八重葎」に、詳しく記されておる。江東駅の北にある長田については、「万寿三年丙寅五月二十三日、古今の大変に長田千軒、此江津今下の古江と申す所なり。民家五百軒余、寺社共に打崩す云。」とあり、同東向寺の条に、「下の入江の渡り有りし時、地内に千体地藏と申して、其数千体あり。万寿三年の大高波に、堂ともに崩れ、皆砂の底となる又、星島の条にも、「万寿波濤に崩れ、今は三つとなる。今ほししま(星島)と言ふ。」

とあり、渡津に関しては、

然る所万寿三年の波濤に、長田千軒の家ども一時に崩れ、この浦の沖に今の加戸辺、はなくり島・でんかふ島・雲居島・高島より、百五六拾町沖の、江ノ瀬島其外、塩山沖の小島数々、是も此時に崩れ、右の六ヶ所の津も皆埋り、其後今の塩田の所々に、田少々追々に出来る故、今塩田浦大川水留る所にて、田島出来る故、中古嘉戸浦、又上の長田千軒の所も、山下に横幅狭き田有り。故こ往古より長田と申す。

とある。更に東して邇摩・安濃の両郡には、何等の伝説を持たない。ついで「八重葎」には、江川をさか上った、邑知口郡三原郷川下村の条にも、「其の川本の南の地、万寿三年五月二十三日、大海波濤涉り、川本の下故川下り村と申す。」とある。

以上江津市江田・渡津一帯に打ち寄せた、万寿海嘯が、江川の川口をはじめ、その東部砂浜の海岸地に、相等な被害を、与えたことがうかがわれる。その災害伝説の範囲は、東は黒松辺をもって、尽きていることを示唆しておる。

以上それぞれ列挙した、諸文献によって知られるように、万寿の大海嘯は、東西三十里にわたる、石見地域に限られた地変らしく、その大災害を被った点が、二ヶ所あったことに気付く。一は益田・高津両河の川筋であって、吉田平野の中心地たる、高津・中須・益田・神田及び、その隣地にある遠田地方、一は江川筋の低地を中心とする、江田・川下一帯の

地方である。そして、その災害程度は、後者よりも、前者の方が中心だけに、はるかに甚大であった。

#### 五、五福寺と十三重の塔

益田・高津の両河によって形勢された、吉田平野の沖積地帯は、その土地がきわめて低い関係上、万寿の津波に当って、これ等の沖積地帯は、余す所なく浸蝕されたものと思われる。前掲遠田「沢江家文書」によって徴しても、上遠田の黒石まで、高波が逆上して居る。これによって想像すると、益田市内の激浪は、久城・山地・辻ノ宮・赤城・稲積・七尾・滝蔵・椎山・峠山一帯山地の、陵脚を洗い、余波は遠く益田川をさか上って、久-茂一帯を浸蝕し、一面高津川を逆上った高波は、内田・安富・横田の低地を洗い、遠く四里（一六キロ）を隔てた、寺垣内村（てらがいち）（今の神田）まで洗った（石見八重葎）ことが分る。ために人馬の災害も相等なもので、今日現存する大塚地蔵や、三百原の荒神は、この時の残死者を葬った所だと言う。（吉田町案内）又、万福寺にはその時死去した、觸髅一箇を蔵しておく。同寺の略縁起によると、次のような因縁話が附随してある。

是レナルシヤレコウベハ、万寿三年五月津波ノ際溺死シタル人ニシテ、或ル山田ノ底ニ沈ミ居リ。然ル所当山第二代目住職、随音相尚（鎌倉）ニ或ル夜告ゲテ曰ク、「我等山田ノ土底ニ沈ミ居リテ、未ダ得脱セズ。何卒和尚慈悲ヲタレ給ヒテ、我等兩人ノ追善回向ヲシ給ヒテ、長ク此等ニ納メ置キ、末世ノ人ニ物語リテ、信心起サシメ給ハバ、其ノ功力ニ依リテ、我等ハ得脱スルコト疑ヒナシト、夢枕ニ告ゲテ、去リシ人ノカウベナリ。」

万寿年間中須・下本郷・久城の一帯には、文化が発達し、櫛代賀姫（くしろかひめ）神社（延喜式内社）や五福寺の建立を見せていたが、この海嘯のために一溜りもなく、堂塔は潰滅し、礎石は砂中に埋没した。そして五福寺中、妙福・蔵幅・専福の三寺は、永久に復原の機を失ってしまった。櫛代賀姫神社は、災後緒継（おつぐ）浜の原地から、現社地明星山に移転建

立、安福寺は災後、原地に小庵をわずかに結び、寺号を存していたが、後年花園天皇の世和二年（1313）遊行二代他阿呑海によって、天台宗を時宗に改派した。これが今日旧益田にある、雪舟庭園で有名な、万福寺の前身である。真言宗金亀山福王寺も同様、原地に再建したまま、今日に及んで居るが、百八十年前浄土宗、益田暁昔寺末に改めた。本尊阿弥陀如来は、鎌倉期の作品である。（中略）

万福寺には万寿の大津波に漂着した、流仏三体を蔵しておく。この流仏は、観世音菩薩・持国天・多聞天の三体である。万福寺の説明書によると、「コノ仏像ハ往古、吉田町大字中須ニアリシ、安福寺ニ安置セシモノナルガ、万寿三年ノ海嘯ノタメ、流没セシモノニシテ、藤原時代ノ作ト云フ。」とある。この藤原様式の仏像や、十一重の石塔を見ただけでも、そのかみ安福寺の、壮大な建築がしのばれる。」（新収1, pp.40-46）。

この津波の到達地点とその高さを文献6が求めているが、それを示したのが次表である。津波の高さについては、鴨島伝承総合学術調査団の報告書に掲載されている都司嘉宣・加藤健二の論文からの引用であるが、この報告書は極めて入手困難である。

しかし、これらの津波到達点を図で示したのが文献7の図4である。20m以上の痕跡地点、高津川に沿って12km近く遡上したことが読みとれる。

この津波の発生原因について、竹本は次のように問題を提起している。

「3.3 大規模な海底斜面崩壊による津波の可能性

これまで示したように、1026年「万寿津波」に関しては、20mを超える津波が島根県の益田周辺の地域を襲ったという文書記録が残されているにもかかわらず、地震の被害はほとんど記録に残されていない。また、中田・他（1995）が、益田市で津波堆積物のトレンチ発掘調査を実施した結果によれば、1026年に万寿津波があったことは間違いないようで

表-1 津波測定値(文献 6)

表-3 益田地域における津波の到達地点とその高さ

| 地点名      | 所在地             | 津波の伝承           | 伝承の出典 <sup>※</sup>                             | 津波の高さ <sup>※※</sup>   |
|----------|-----------------|-----------------|------------------------------------------------|-----------------------|
| 石見湯      | 益田市飯浦町          | 岬の先端が欠けて今はない    | 石見八重彦 <sup>12)</sup>                           | —                     |
| 持石(場所不明) | 益田市高津町持石、春日神社   | 神石が流された         | 石見八重彦 <sup>12)</sup>                           | 18m                   |
| 松崎       | 益田市高津町          | 人麻呂の木像が流れ着いた    | 正徹物語 <sup>14)</sup> ・正一位柿本大明神祠碑 <sup>15)</sup> | 23m                   |
| 櫛代賀姫神社   | 益田市久城町、益田川右岸    | 被災したので現在地に移転した  | 柿本人麻呂と鴨山 <sup>16)</sup>                        | —                     |
| 安富       | 益田市安富町、一帯       | 津波が到達した         | 柿本人麻呂と鴨山 <sup>16)</sup>                        | 16.2m以上               |
| 護宝寺      | 益田市横田町神田        | 護宝寺が流された        | 石見八重彦 <sup>12)</sup>                           | 22m                   |
| 船ヶ溢      | 益田市横田町市原        | 船が漂着した          | 横田物語 <sup>17)</sup> ・文献 <sup>13)</sup>         | 21m                   |
| 椎山       | 益田市東町           | 津波が到達した         | 柿本人麻呂と鴨山 <sup>16)</sup>                        | 文献 <sup>13)</sup> は否定 |
| 久々茂      | 益田市久々茂町         | 津波が到達した         | 柿本人麻呂と鴨山 <sup>16)</sup>                        | 文献 <sup>13)</sup> は否定 |
| 遠田八幡宮    | 益田市遠田町下遠田       | 社殿が流された         | 安田村発展史 <sup>18)</sup> ・(遠田八幡宮由緒)               | 8m以上                  |
|          |                 | 砂丘を乗り越えた        |                                                | 10~12m                |
| 貝崎       | 益田市遠田町中遠田       | 水田に津波が到達した      | 安田村発展史 <sup>18)</sup>                          | 22m                   |
| 黒岩       | 益田市遠田町中遠田       | —               | 安田村発展史 <sup>18)</sup>                          | 25m                   |
|          |                 | 海岸から運ばれた巨岩(津波石) | 文献 <sup>13)</sup>                              |                       |
| 遠田黒石神社   | 益田市遠田町上遠田、黒石八幡宮 | 先祖の祠堂を丘の上に移した   | 安田村発展史 <sup>18)</sup> ・(沢江家文書)                 | —                     |
| 滑堤       | 益田市遠田町上遠田、並良堤   | 津波が到達した         | 柿本人麻呂と鴨山 <sup>16)</sup>                        | 文献 <sup>13)</sup> は否定 |
| 二艘船      | 益田市木部町          | 2艘の船が打ち上げられた    | 柿本人麻呂と鴨山 <sup>16)</sup> ・(鎌手村史)                | 12.2m                 |

※「伝承の出典」のうち、括弧書きは原典とされる文献  
 遠田八幡宮由緒: 宝暦11(1761)年、大島八塩による、原本所在不明  
 沢江家文書: 享保年間(1716-36)の成立、1772年写本、原本所在不明  
 鎌手村史: 大賀周太郎による、(詳細不明)

※※「津波の高さ」は、文献<sup>13)</sup>による。

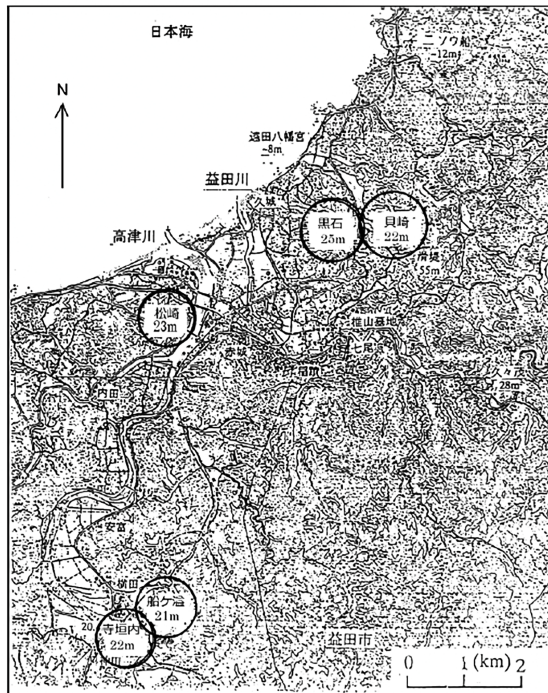


図 4 益田市周辺で都司・加藤 (1995) が実施した測量地点の範囲。

図-7 津波高 20m 以上の地点 (文献 6)

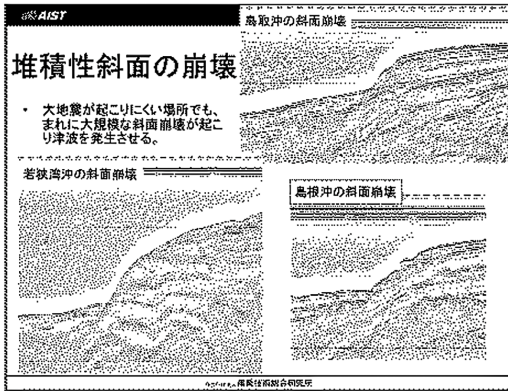


図7 堆積性斜面の崩壊 (岡村行信 (2013) : 日本海の津波波源より引用)。

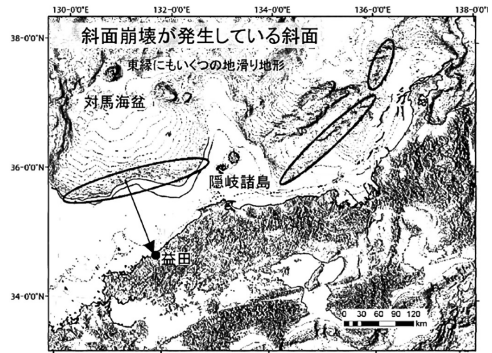


図8 斜面崩壊が発生している斜面 (岡村行信 (2013) : 日本海の津波波源より引用)。

図-8 文献7より引用

あるが、津波堆積物が発見された範囲は意外と狭く、海岸線から2km程度遡上したに過ぎないということである。

万寿津波の資料の特徴をまとめると、次のようになる。

- (1) この津波の際の地震の被害は報告されていない。
- (2) 海岸線(河口)から10kmほどさかのぼった標高が20mを超える地点にも津波が到来した痕跡がある。
- (3) トレンチ掘削調査の結果によれば、津波堆積物が遡上した範囲は意外と小さく、海岸線から2km程度の範囲である。

以上の3点を矛盾なく説明できるような津波発生メカニズムを考えなければならないがこれはまだ定説がなく、なかなか難しい問題である。本稿では、一つの可能性として、産総研の岡村(2013)が指摘した海底の堆積性斜面崩壊による津波の可能性を検討した。」

(文献7)

そして、「次の図7及び図8は、岡村(2013)による「日本海の津波波源」より引用したものであるが、図7には、日本海西南部のマルチチャンネル音波探査で、大規模斜面崩壊が見つかった若狭湾沖、鳥取沖及び島根沖の海底地盤構造が例示されている。

・竹本の結論は次の通りである。

#### 「4. まとめ

日本海側に発生する津波に関して、西南日本は東北日本に比べて大きな津波は起きないと広く言われてきた。その根拠の1つが2014年8月に『日本海における大規模地震に関する調査検討会』が公表した日本海側の津波高の予測であり、日本海沿岸西南部では高いところでも概ね3~4mとされている。これについての検討は、今後さらに進展するものと考えられるが、西南日本の島根県益田地方で1026(万寿3)年に20mを超える津波があったという伝承が、地元の多数の場所に残されている。

そこで、本稿では、万寿津波についての検討を行ったが、通常海底断層の上下変位に伴う地震と津波としては説明がつかず、島根沖の大規模海底斜面崩壊を想定することにより、地上に到達した津波高の伝承を含めて矛盾なく説明できる可能性が見いだされた。」

#### 4. 林叟院物語

明応七年八月二十五日(1498.9.20)の地震・津波では、遠江・三河・駿河・甲斐・相模・伊豆・京都・奈良・会津が被災したが、

「[林叟院五百年史]▽

林叟院は文明三年創立以来、賢仲禅師は道風を四海に宣揚したが、早くも二十七年の星霜

を経て明応六年を迎えた。ある日**異叟 - 普通とは異った僧** - が林双院を訪れた。

そして賢仲院と談笑したが、恰も長年交際した友達のように親しかつた。賢仲禅師が時どき目を上げて異叟を見ると、顔色には威厳があつて、眼光は人を射るようであるが、言葉は軟くて、しかも低い声であつた。この時異叟が顔色を正して言うには、惜しいことにこの地は厄難がある。**願くば尊師よ、私の言を信じて、移転するのがよかろうと忠告**した。賢仲禅師は、その言葉を不思議に思ったが、異叟をつれだつて適地を探がすため、門を出た。足は自然と高草山麓に向つていた。杉や松の密林の中を進んで、山の曲り角に出た。異叟はここに立留つて指さして言うには「此の処こそ寺として最適の地である、もし此の言を信ずるならば私は師のために永く護法の山神になろう」と告げた。賢仲禅師が首を廻わして、四囲の情況をみるに山には松杉が生い繁り、二つの溪流は集つて一水となり、静寂な靈域で、寺を建つには絶好な土地であつた。賢仲禅師が欣然として振りかえると異叟の姿は無く一片の石を遺すのみであつた。師は護法の神であることを信じて、合掌低頭して帰院した。

事の次第を法永居士に告げ、間もなく寺をこの地に移し、林双を改めて林叟とした。思うに法永居士の実父加納彦右エ門は、今川義忠に仕え、諱の一字を賜つて義久と名乗つた人物で、坂本村の地頭をつとめ、方の上城を守衛し、坂本に居館を持っていた事実を考え合せると、坂本の地を選んだこともうなづける。

果せるかな、翌明応七年八月には大雨があり二十五日は大地震、駿河の海は津波が起つて異叟の予言通り、**林雙の旧地は海となつた**。この時不幸にも溺死したものは二万六千人と言われている。この二万六千人は二百六十人を草休で書いた文書を読み誤つたもので、他の記録に溺死者数百人と記されていることを参酌すれば二百六十人が正しいと言えよう。

林叟院は異叟の忠言によって、この難を逃がれ明応九年になつて諸堂が設備し、小川の旧観に勝るようになった。(都司注)「西駿曹

洞宗史」にもほぼ同一の文がある。」(新収 1, p.112)。

「[小川町誌] ○焼津

会下之島

会下之島は六七百年前は、現在より遙かに海中に延びていたことは、記録、伝説によって明かである。又同地は東益律坂本にある林叟院とは深い関係にあり又会下とは仏教語であつて修行僧の集りをいう。往古信香院が道場であつた為に此の地を会下島と付けたのである。林叟院開創記に依れば、今から四百八十二年前即ち後土御門帝の文明三年(西 1471)で境内は今の波打際より五丁程の海中にあり、現在の汐除堤防の側(乙ヶ丘)



図-9 林叟院(グーグルマップより)



に三門田と称する字があり、現海洋道場が第三門になっていたものである。又林叟院開創当時の波打側は、寺院を海岸直ぐ近くに建立するとは考えられない故まだ遙か先であったに違いない。海辺より四丁程沖合、約一畝四方に四基の大柱石が波澄み底が眺められる秋風穏かな日には発見出来るが、この石は第一門である。

林叟院が現在の坂本に移ったのは明応六年（西一四九六）であったが、その翌年即明応七年八月八日より大雨初り同二十五日大地震大津浪来り民家五百数十戸波濤に没し溺死者二万六千という大災害をうけ、その寺跡は遂に海中に没した。被害は田中領駿遠両国合せて三十七ヶ村であるというから言語に絶する大きなものであった。

（都司注）同書二百十五ページ元禄十二年八月十五日の風津波の説明にも「田中領内駿遠領国にて津浪に逢った村数は三十七ヶ村」とあり、次の三つの可能性が考えられる。すなわち、A 明応地震津波元禄風津波とも田中領三十七ヶ村に被害が出た。村数が一致するのは偶然である。B 元禄風津波に三十七ヶ村の被害が出たが、それが明応の津波によるものと誤り伝えた。C 明応の津波で三十七ヶ村の被害が出たのを元禄風津波によるものと誤り伝えた。

元禄の風津波の時三十七ヶ村に被害が出たというのはその遭難者の一人とおぼしき富田五郎右衛門の文書の写本に現われるのでCの可能性はうすいと考えられる。

○

明応七年（西一四九八）の津浪は林叟院創記によれば溺死者二万六千余人とあるから古来未曾有のものであったことが推測される。

駿河記には明応年間会下島並びに小川本郷の地田野辺三ヶ名の辺まで海水涌き狂濤入りし、と記されているが同地不動院裏の田中の小祠のある森は此の時大舟の親柱が漂着した跡であると言伝があり又一区公会堂裏の芝原の小字名も、此の時浪の為荒れ果てて芝原となった為名付けられたと云われている。此時遠州では浜名湖の口が切れて今切が出来淡

水変じて海水となり、其の国名となる遠き淡海国もその意味を失って終わった。

伊豆の海も又暴溢し仁科郷、村害を被ること最も甚しく波濤の陸上に上る事凡そ十八丁、中村の寺門以下園皆浸水せり（豆州去<sup>マ</sup>稿）とある処を見ると震源地が駿河湾より遠州難にあったことが推測される。

この津浪に関連して、林叟院（口碑林叟院と明応の地震参照）の坂本移転、教念寺の創立、小川地藏尊の漂着等のことがあった。教念寺の創立は寺記によれば天文元年（西一四六六）となっているが駿河記其他には明応七年秋観音上人京より東へ下る途中益頭郡海立数百人の溺死する者を見、此郷に小院を建立しその屍を集め骨堂を建て亡霊の供養を修せられた、とある。

○

豊栄（法永）長者（長谷川次郎左エ門政宜）

明応六年異人来り天変地異を予言したので豊栄再び賢仲禅師と謀って林叟院を高草山坂本に移した。（以後林叟院と改寺名）翌年八月大津浪があり溺死者二万六千、会下島林叟院跡は海底となった。翌年林叟院の伽藍完成し、政宜は永正十三年六月朔日八十七歳にて没した。法名林叟院殿扇庵法永居士と号し林叟院に葬る。」（新収1, pp.113-114）

「〔寺院名鑑〕▽○静岡県

○ 高草山林叟院沿革

開創当時は、現焼津市小川町に建立せられたが、建立後二十七年、**或る修験者の天変地変の予言により現在地に移転した。**

果して翌明応七年八月八日大洪水、同二十五日大地震と大津波により、小川の寺跡は海中に没し去った。当院はその修験者を守護神として祀っている。尚その時『林双』の寺号を『林叟院』と改めた。焼津市坂本一四〇〇」（新収1, p.115）

「〔<sup>修訂</sup>駿河国新風土記下）○新庄道雄（天保十六没）原著，益津郡上

古は今より土地も大なりしにや、風土記、和名抄に本郡に収めたる地名今は志太郡に入



写真-1 高草山頂を背後に佇む現在の林叟院 (文献8より)

たるもの多し、又明応七丁午年八月八日、大雨、同二十五日の大地震にて、海水大に涌、洪濤を起し、村里変じて海となる所多くして古を考がたきもの多し、

○法永も此事を異なりとして、不日寺を今の所に移し林叟を改め林叟院とす、今の**山神石**と云は則彼異叟の遺跡也、其翌、明応七年秋八月八日大風雨、同二十五日大地震動し、海水大に湧き、溺死する者凡二万六千余人、異人の言の如く、果して林叟院の旧地、忽変じて巨海と為ると彼院の古伝に見ゆ。」(新収1, p.114)

## 5. 津波記念碑

### 5-1. 波よけ地蔵

天平二十年十一月十一日 (748.12.9) 若狭  
〔越前若狭の伝説〕

「(注、以下は伝説であり、いつの事か不明であるが、ここに記し後考をまつ)

波よけ地蔵 (佐田)

若越国境の関峠に石の地蔵尊があり、これを波よけ地蔵という。むかし大津波があったとき、



写真-2 山神血脈石 (文献8より)

打ち寄せた津波はここで止まったという (永江秀雄)

のた平 (佐田)

佐田の東南にある乗鞍岳 (六五〇メートル) の中腹には、のたくぼ. のた平 (だいら) という所がある。のたとは波のことである。そこには津波で逃げた人々が使用した粉ひき川の石うすがあるという

(永江秀雄)

大津波 (坂尻)

古代の坂尻は数百戸の部落であったが、大津波のために海中に没して跡方もなくなった。この大津波のとき坂尻の天王山 (約一八〇メートル) へ逃げた者は腰まで水につかり、山上 (やまがみ) の御嶽山 (約五二〇メートル) へ逃げた者は水に足がつかったという。(永江秀雄) (新収1, p.7)

関峠については、ウィキペディアに記載がある。それによると、標高は100m程度であるという。福井県敦賀市と同県三方郡美浜町との境にまたがる峠で、その頂上付近には地蔵堂がり、4体の地蔵が祀られている。1体が咳止め地蔵、1体が波よけ地蔵、残りの2体は何かわからないという。県道225号線を走って地蔵堂に到着する状況は、動画として、<https://www.youtube.com/watch?v=wAFYVpX45xs> で体験できる。

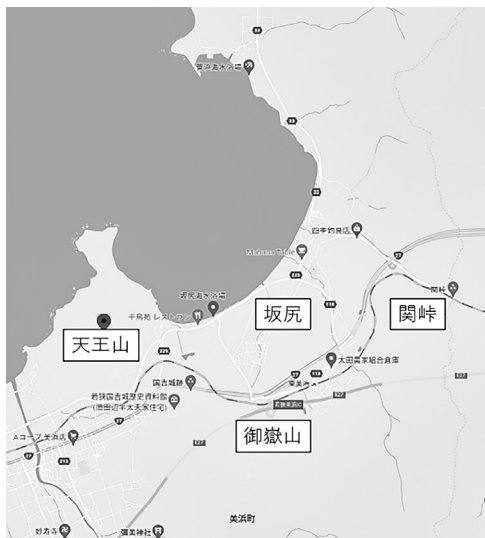


図-10 波よけ地蔵のある関峠

<https://tanganotime.com/etizen/turuga/seki.html> には、「丹後の地名 越前版」として「関(せき) 福井県敦賀市関」があり、波除地蔵が掲載されている。

また、グーグルマップの関峠地点の写真にも、同様の写真があり、波除地蔵の説明板には、次のように書かれている。

「波除地蔵 Namiyoke Jizo (Jizo Which

Avoids Wave)

佐田の七不思議 番外1 SPECIAL EDITION 1

若狭国境の関峠の頂上に安置されている石仏。昔、大津波が打ち寄せた時に地蔵前で津波が引いたと言われていました。元は峠の登り口にあったと言われていましたが詳細不明。関では、地名にあやかって咳がよく治るとの言い伝えもあり、厚く信仰されています。

The stone image of Buddha enshrined at the summit of Seki Pass on the border between wakasa and Echizen. Tradition says that, when large tsunami hit this area, the tsunami stopped in front of the Jizo and went back. It might be set at the bottom of the pass. But we do not know the details. People in Seki District have deep faith in this Jizo. Because of a tradition that this Jizo cure people's cough after the name of Seki

(The Japanese word for cough is "Seki")

5-2. 大岩

慶長9年12月16日(1605.2.3) 鞆浦 立石  
「[土佐古今の地震]

(丁) 記念物

土佐東部の国境に近き阿波国海部部に鞆浦と

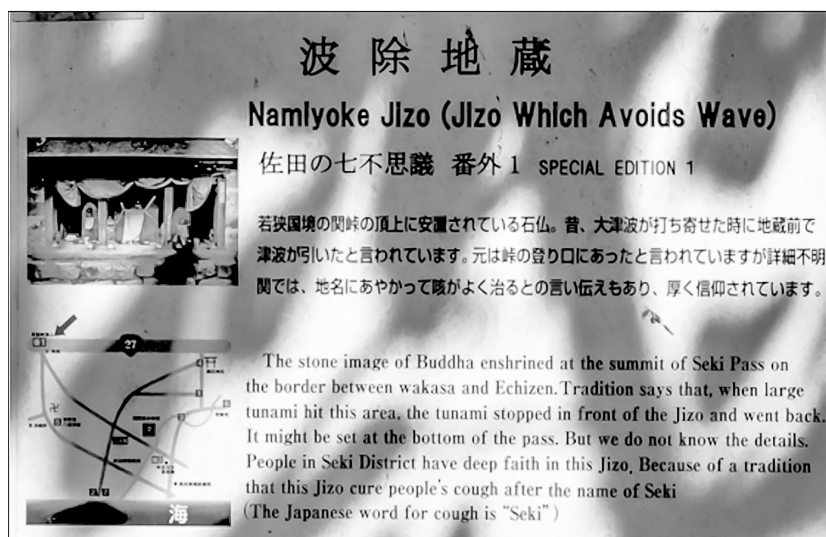


写真-3 波よけ地蔵説明板 (グーグルマップより)

呼ぶ一村落あり村中に立石として高丈余の紀念碑石あり該地震の事に関し末世の戒として銘文を刻すといふ三災録に其写あり曰く

敬白右意趣書、人皇百十代御宇、擬長九甲辰年十二月十六日、亥刻、於<sub>レ</sub>常、月白風寒、凝<sub>レ</sub>行歩<sub>レ</sub>時分、大海三度鳴、人々巨驚、拱<sub>レ</sub>手<sub>レ</sub>処、逆浪頻起、其高十丈、来七度、名<sub>二</sub>大潮<sub>一</sub>、剩男女、沈<sub>二</sub>千尋底<sub>一</sub>、百余人、為<sub>二</sub>後代言伝<sub>一</sub>

奉与之各平等利益者必也、

(訓点句頭は便宜施こす所、末文又誤字あるに似たり)」(新収 2, p.85)

〔名西郡志〕○徳島県

慶長の地震

慶長地震に関する本郡の資料は鞆浦大岩の碑文と宍喰浦旧記の二つが主たるものである。鞆浦大岩の碑文は左の如くである。(原漢文)敬白、

右意趣は人王百拾代御宇、慶長九甲辰季、拾二月十六日未亥の刻、月常より白く、風寒く行歩凍る時分、大海三度鳴る、人々大に驚き、拱手する処、逆浪頻に起り、其高十丈、来る事七度、大塩と名づく也、剩へ男女千尋の底に沈むもの百余人、後代に言ひ伝ふる為、之を興し奉る、各々平等利益は必ずなり。」(新収 2, p.87)

〔海部町史〕○徳島県 慶長九(一六〇四)大地震・大津波 鞆浦北町の路傍にある高さ一丈・径一・二乃至一・八丈の研岩の蓮弁形輪廓内の銘、(大岩碑文)

建 立 慶長碑：寛文4年(1664) 宝永碑：不詳



慶長碑(左)および宝永碑(右)大岩の碑

写真-4 大岩の慶長碑(文献9)

『南無阿弥陀仏、敬白右意取者、人王百拾代御宇慶長九甲辰季十二月十六日未亥刻於常月白風寒、凝行歩時分、大海三度鳴人々巨驚、拱手処逆浪頻起、其高十丈、来七度、名大塩也、剩男女沈千尋底百余人為後代言伝、奉興之、各平等利益者必也』(新収 2, p.88)

### 5-3. 供養塔

寛文二年九月十九日(1662.10.30)〔日向・大隅〕

「○殿所 (トンドコロ) 地震余話

……当時郷土の人-は、一夜にしてかくも大変化を起こした天地異変を神業と信じ、おのき恐れて三池神社を建立し、その由来を書いた記念碑を建立した。

その碑に左の通りある。

『寛永十八年辛巳九月三日夜に及ばんと空俄に曇り雷電震動爆発暴風雨起り地を穿ち山を崩し水溢れ浪高くその音烈しく辺村の万人耳を掩ひ面を伏せて驚怖怪居せり漸く夜明に及び内海折生迫両津のものは震動の地を尋ね述むるに廻り巖高く重り中は清水の大池となりて外には海水溜り内には河海の遊魚浮沈せり誠に巖石畳々たる平地一夜にかくのごとく靈地となりたること神通不思議慎み謹んで拝すべし

天明四年甲辰年曆三月令日』

この碑には寛永十八年(一六四一)となつて地震のあつた寛文二年(一六六二)とは二十一年の開きがあるが、天明四年(一七八六)では、百二十四年前のことなので、誤り伝えられていたものと思われる。なお飲肥藩重要事項年表には、寛文二年の地震の外、貞享元年(一六八四)の地震の記録はあるが、寛永十八年に地震のあつた記録は全くない。

注(1) 殿所は外所との記録もある。

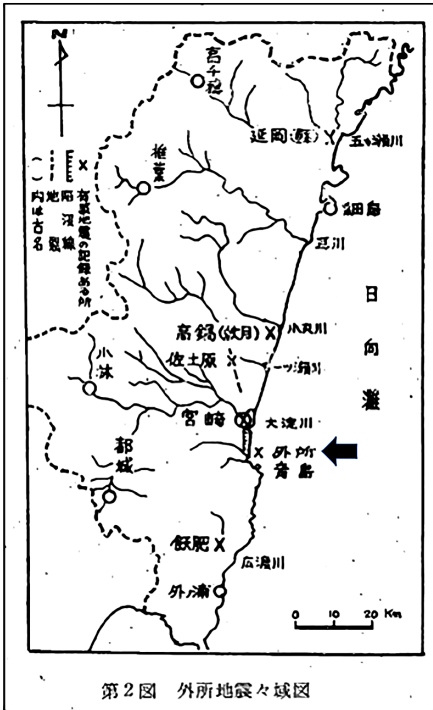
(2) 供養碑 木花島山の入口国道220号線の西側に、この地震によってなくなった人々の霊を慰める供養碑がある。五十年毎に一基ずつ建てることになっている。昭和三十二年三百年目の供養碑が建てられた。

(3) 三池神社 無格社、天明四年の建立



写真1 外所地震供養碑 (全7基)

写真-5 供養碑群(文献10より)



第2図 外所地震々区域

図-11 外所位置(文献11より)

と思われる。明治三十九年十二月三日野島神社に合祀した。その際記念碑も同境内に遷した。」(新収2, p.297)

「(32)

●東堂 (図9 参照) の堂前にある供養碑で、8名の死亡者を記す。この碑に向い合って、史料の8名を含む37名の供養碑 (天保十五

年建立。羽鳥 (1967) に「津波碑」と記されている) がある。これは碑文に「元禄十六未年より」とあるの で、元禄十六年以降天保十五年までの死亡者の供養碑ですべてが津波による死者ではない。なお、真浦威徳院の過去帳 (元禄後のもの) の余白にも、この8名の死者の戒名が書かれていた。

●安遊堂 (図9 参照) にある供養碑である。史料的价值は乏しいと思うが参考のため採録した。」(新収2 別巻, pp.215 ~ 216)

「隣り村の御宿 (現御宿町) は西方から来襲したとみられる津波を遮るべき岬もなく、海に沿った砂原も低く且、広いので被害は勝浦より大きかったと思われる。この時の溺死者を埋めたという袴山、通称せんげんやまに後年供養塔を建てたが、称して千人塚というが、この千人塚という名は溺死者が多かったか、若しくは溺死漂着の多かったのを示しているようにおもう (一説にこの塔は慶長の津波の被害者の供養塔で正保年間に建てられたものともいう。)」(新収2 別巻, p.219)

#### 5-4 津波塚・千人塚

元禄十六年十一月二十三日 (1702.12.31)

南関東

「山武郡緑海村 (現成東町) 大字松ヶ谷区地藏堂の境内に千人塚あり、元禄の震災にあい

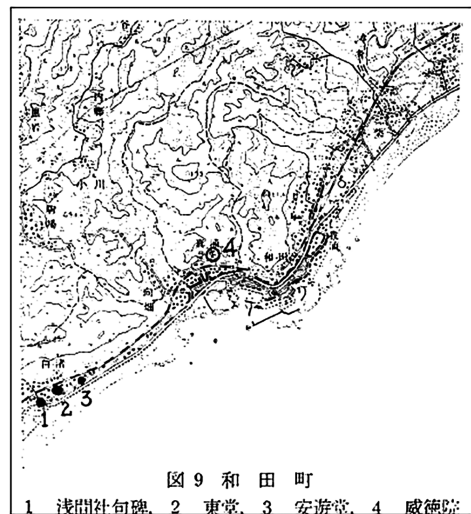


図9 和田町

1 浅間社句碑 2 東堂 3 安遊堂 4 威徳院

図-12 新収2 別巻の位置図

溺死した者を合葬し其の墳上に高さ一丈許りの石地蔵を安置し、亡者の追福を祈ったのである。上総町村誌によると死者の数詳ならず、蓋名称に因れる者ならん。としている。」(新収 2 別巻, p.220)

「〔九十九里町誌各論編 上〕

・・・・・・・・

さて、この津波の引いた跡には、汀線最後の微高地である、2.5メートルの等高線上の各所に、死体の山が築かれたと思われる。その場所に『津浪仏』(溺死者の供養塔)が建てられたということがわかる。と結んでいる。」(新収 2 別巻, p.224)

「〔九十九里〕

・・・・・・・・

それにしても「元禄津波」の犠牲者を葬った千人塚や供養塔が、九十九里一帯に数知れず点在しているのも事実。そのひとつ、長生郡長生村一松の本興寺にある供養塚には、

『三八四人を合葬』

とあるほか、数ある塚の全てが“数百人”単位で葬ってあるので、いかに多くの人が津波にやられたか。

昔から、

『地震が起きてすぐ逃げれば、イザリ(両足の不自由な人)でも助かる』といわれている。早く高台などに避難すれば、助かる余裕は十分あるというのだ。“万覚書”にも、

『延宝の津波でこりた釣村の人たちが“避難体制”を整えていて後の元禄津波のときは、いち早く避難したので、他の土地から出かせぎにきて、納屋などに残っていた一四、五人が死んだだけ』

と被害を最少限度に食い止めたことが記録されている。

津波に襲われると、人畜の被害もさることながら、営々と築き上げた屋敷や船、田畑が一瞬のうちに破壊され、土砂に埋まる。生残った者も当然、生活に困った。

年貢米などにきびしい幕府も、あまりの被害の大きさに驚き、かなりの年貢米、塩年貢

を免除している。」(新収 2 別巻, p.224)

「〔田方郡誌〕▽

元禄十六年十一月二十三日夜、伊豆沿岸一帯大海嘯あり、人畜の死傷挙げて数ふべからず。宇佐美村のみにても死者三百余人或は五百余人と称す。伊東にては死者百六十四人、多賀地方の口碑にては、海面より十丈も高き高地の樹枝に海藻の懸りしとて、未年の津浪と称して今に人口に膾炙せりと(多賀、宇佐美、小室村誌)。(新収 2 別巻, p.282)

「〔静岡県伝説昔話集〕▽十本松(田方郡伊東町)玖須美海岸汽船扱所の裏にある老松は、昔は十本あったさうであるが、今は七本しかない。その下に元禄十六年の津浪の記念碑がある。(三枝菊江)。(新収 2 別巻, p.283)

「〔成東町史「通史編」〕成東町史編集委員会編 s61.3.30 成東町発行

### 第三章

#### 2 成東地方の津波塚

##### (1) 松ヶ谷の千人塚

成東町松ヶ谷の南方、篠笹と樹木に囲まれた共同墓地の中に、一体の地蔵尊があって、俗に「千人塚」とよばれている。元禄大津波の七回忌にあたる宝永六年(一七〇九)に造立されたもので、高さ三尺許りの地蔵尊の台座には、前述のごとく松ヶ谷村惣念仏講中によって、追善供養の法会が営まれた旨の銘文が記されている。多くの津波塚は伝承のみであるが、この千人塚の場合、造立の由来を記した古文書が残されている。

『見聞雑誌』によれば「爰ニ其昔元禄十六年関東大地震、同年十一月廿三日ノ夜九十九里大津波、其頃則栗山川ト木戸川一ツニテ其川シモ宿之下ニ至ル、津波ノ為川中へ波ニ打込レ死亡人川下へ漂着ス、現今宿之下地藏堂此所へ無縁の死亡人埋ムル、四百人ト云フ、百人ト云フ、八十四人ト云フカ実ナルカ、供養ノ為今有地藏尊ヲ安座スルナリト云フ、其供養ノタメ七月廿三日大セカキト云フテ今ニ施行スト云」

らの記録によると、当時松ケ谷村の周辺は海岸に沿って南流する栗山川と東流する木戸川とが合流し、宿之下付近で大きく南に蛇行して海に注ぐ河口となっていたものと推測される。そのために、沖波が去った後、夥しい死骸が漂着、その数は四〇〇人とも一〇〇人とも、あるいは八四人とも伝えられる。これらの人々は、松ケ谷村の芝地に無縁仏として葬られ、七回忌の供養に地蔵尊が造立されて、その後、毎年七月二十三日に「大施餓鬼」の法会が催されたといわれる。(中略)

## (2) 本須賀の百人塚

すでに紹介したが、松ケ谷の千人塚から西方一・五キロメートル、成東町本須賀の畑中に一基の五輪塔がある。これも元禄大津波の犠牲者を葬ったもので、古来、土地の人々は「百人塚」と呼んで、現在でも香華をそなえ仏果菩提が吊われている。『百人塚由来記』によれば、当時の状況を次のように記録している。

元禄十六癸未年、十一月廿二日ノ夜、晴天ニシテ雲無三更ノ比ニ大地ノ頻ニ震動シテ、諸人天地モ倒ルカト思ヘリ、故家ノ忽チ破レ、山ハ崩レテ、池ハ平地ト成ル、衆人大ヒニ周章ス、逝去ラント欲スレドモ遁レル足ヲ留メルベキ地無シ、妾ニ災難尚ヲ難ヲ累ヌ、海瀕ノ庶子等、海水ノ動波津ニ揚ルトハ努(夢カ)思ハズ、処ニ群集リテ唯地震ヲ歎ク耳、夜鶏鳴ク平旦ノ比、直ニ揚ル口(注：古の下に又)箭勢自り速シ(中略)磯辺ニ艦ヲ並ベル漁船、浦辺ニ棟ヲ列ス漁師等、件ノ津波ニ打被破、落花微塵ト成リテ畢、之ニ依リテ、死人田畑堀江ニ満チ、畦畝ニ枕ヲ並ベル、時ニ及デ連命強キ者、漸ク命ヲ全ス、九十九里ノ溺死者都テ幾千万カ知レズ、当浦ノ溺死者九拾六人、終人は是ヲ墓所人ニ葬リテ、百人塚ト名ス云々。」(新収続補遺別巻 pp.7-8)

塚というと土を盛り上げたものを想像するが、両方とも平地である。千葉県山武市の公式ホームページや寺社・石碑データベース、そしてグーグルマップが良い情報を与えてくれる。

千人塚には、説明版が二つあり、それぞれ

次のように書いてある。

黒い石の説明は、墓地の中、地蔵菩薩像の足元と思われる場所にあり、成東町教育委員会のものである。その説明は、

「史跡 千人塚



図-13 千人塚・百人塚の一  
グーグルマップより制作



写真-6 百人塚：sekihi.minpaku.ac.jp/spots/view/6121



写真-7 千人塚：山武市公式 hp：  
<https://www.city.sammu.lg.jp/page/page001497.html>

所在地 成東町松ヶ谷字南川端 2590  
 所有者 宿之下区  
 指定年月日 昭和 55 年 12 月 22 日  
 面積 墓地 1,408m<sup>2</sup> の内 0.675m<sup>2</sup>  
 海嘯 (津波のこと) 元禄十六年 (1703) 癸未 (みずのとひつじ) 十一月二十二日, 本州の地に大きな地震がありました。夜東の海で大きな海鳴りがして山のような波が陸地に侵入して, 夷隅, 長柄, 山辺, 武射の四郡の海岸の村落が其の害を被ってしまった。この津波は家畜を斃し, 家屋を奪い去り, 溺れ死んだ者は何千人か数えきれない。人々の死体を収集して各所に埋葬した。最も著しい墓は六ヶ所あり, その一つとして千人塚がある。死者の数は詳しくわからない。千人塚というくらいだから, かなり多くの人々が葬られたのであろう。墓の他に自分たちだけで埋葬した者はかぞえきれないといわれている。

碑文 成東町教育委員会

と書かれている。

一方, 墓地入り口にあるのは白い生地に記された山武市教育委員会のもので

「山武市指定文化財 (史跡)

千人塚 (元禄大津波供養碑)

所在地 山武市松ヶ谷字南川端地先

指定年月日 昭和 55 年 12 月分 22 日

元禄十六年 (1703) 旧暦十一月二十二～二十三にかかる子の刻 (午後十一時～午前一時) 武蔵・相模・安房・上総を巨大地震が襲い, さらに同日丑の刻 (午前一時～三時) 高さ四～八m の津波が各地沿岸に襲来した。特に九十九里沿岸は, 現存する供養碑や古文書から, 五千人以上の死者を出すなど悲惨な被害を受けたといわれる。九十九里沿岸各地には, 犠牲者を供養するための供養碑が建立されたが, その数は栗山川から太東岬間に三十九基が現存している。

本市には成東地区に百人塚・千人塚, 蓮沼地区に千人塚の三基が現存する。

この地蔵尊は, 元禄大津波の七回忌にあたる宝永六年 (1709) に造立。

台座銘文

経日 地蔵菩薩以大慈悲芳口名号□□時元禄十六年未之霜月廿三日 大地震津波而溺死当村諸精霊等七回忌□□増進仏果誌為乃至自他法界平等利益 松谷村惣念仏講中 □□誉真住

平成 25 年 3 月吉日

山武市教育委員会」

と記されている。

末尾ながら付け加えると, 元禄大津波に関連する津波供養碑については, 羽鳥徳太郎: 南房総における元禄 16 年 (1703 年) 津波の供養碑, - 元禄津波の推定波高と大正地震との比較 -, 地震研究所彙報 (津波デジタルライブラリより入手可能) が詳しい。

## 6. おわりに

以上で, 新収日本地震史料全 21 巻を読み, 紹介した。いずれも千頁に近い大著であった。今後は

武者金吉編 日本地震史料

文部省震災予防評議会編 増訂大日本地震史料 第 1- 第 3 巻

宇佐美龍夫編 日本の歴史地震史料 拾遺

- 拾遺 5 ノ下 までの 8 冊

の 12 冊を読む事となる。

## 引用文献

- 1) 関西中高一貫校・教員のブログ:  
<https://don03.hatenablog.com/entry/2019/05/03/133414>
- 2) 大地震・大津波の災害と対策, 生涯大学「海鳴学園」大学院 ふるさと研究発表会  
<https://www.city.kosai.shizuoka.jp/material/files/group/33/05290469.pdf>
- 3) 藤原 治ほか (2010) 1498 年明応地震による遠州灘沿岸浜名川流域の地形変化, - 掘削調査による地質学的検討 -, 歴史地震第 25 号, pp.29-38
- 4) 「姫街道の歴史 [www.ne.jp/asahi/teruo/i/](http://www.ne.jp/asahi/teruo/i/)



- top/himekaidou/rekishi/rekishi.html]『三浦繁著「姫街道ガイドブック」より引用』
- 5) 新居町史編さん委員会 (1986): 新居町史 第八巻 近世資料四 宿方・地方資料, 新収日本地震史料続補遺別巻, pp.40-48.
  - 6) 加藤芳郎: 益田を襲った万寿3年の大津波 益田を襲った万寿3年の大津波 - 島根県技術士会 <http://peshimane.net/uploads/2013/07/2011-...>
  - 7) 竹本修三: 1026年の万寿津波 <http://ss828607.stars.ne.jp/1026tsunami>
  - 8) 沿革: 高草山 林叟院 Rinso-inn【公式サイト】 [www.rinso-in.com/history.html](http://www.rinso-in.com/history.html)
  - 9) 南海地震を知る 徳島県の地震・津波碑 [https://www.jishin.go.jp/main/bosai/kyoiku-shien/13tokushima/material/tksm\\_22\\_3.pdf](https://www.jishin.go.jp/main/bosai/kyoiku-shien/13tokushima/material/tksm_22_3.pdf)
  - 10) 大平明夫: 宮崎県における自然災害に関連する石碑の特徴と防災上の意義 -GIS を利用した防災教材の一例: 「自然災害石碑マップ」, 宮崎大学教育学部紀要 第92号 (2019) pp.58-78. [https://researchmap.jp/read0161348/published\\_papers/31075273](https://researchmap.jp/read0161348/published_papers/31075273)
  - 11) 安井 豊・田辺 剛: 日向灘の外所地震津波調査について, 験震時報第26巻, pp.33-38, 昭和36年6月 <https://jma.go.jp/jma/kishou/books/kenshin/vol26p033.pdf>